

伝統産業の「極める文化」が日本を支える

プロダクトデザイナー 喜多俊之さん

和紙を使った照明器具が イタリアで大ヒット

日本の伝統工芸の方々とお付き合いを始めてもう四〇年くらいになります。一九六〇年代の後半からですが、その頃伝統工芸がいちばん衰退の激しい大変なときでした。現在では人々の認識が変わりつつありますが、当時は「古いものは時代遅れ」という考え方が一般的でした。

知り合いになった美濃の和紙職人の方が「もうやめようと思うんですよ」と言うのを聞いて



「何か使い方を考えてみます」と約束しました。その年から私はイタリアに行くことになっていました。それで、向こうで照明器具のデザインをする機会があったときにその職人の紙を使ったのです。インテリアブームが始まっていた現地でそれがヒットしたのです。その職人さんの元に大量の注文が来るようになり、そのとき、それを見て、例えば日本の伝統工芸も生き延びる道があるのだという事に気が付いたのです。

これが契機で、そのあと輪島の漆塗、佐賀の有田焼など、産地の方々とお付き合いが続

きました。伝統工芸の仕事をライフワークとしてやろうと決心したのも、その和紙を使った照明器具TAKOのヒットにありました。

伝統工芸を衰退させた住いの納戸化

私が六〇年代後半に渡ったイタリアは、戦後の復興から立ち直って、新しいものだけでなく過去の古いものの値打ちに人々が注目する時代に入ったときでした。時間のたつたものほど値打ちがあるとして手に入れたいと考へはじめた頃でした。都市や山間部、漁村に

喜多俊之（きた・としゆき）

1942年大阪市生まれ。1969年より、プロダクトデザイナーとして、日本にとどまらずイタリアを始め、国際的に制作活動を拓げていく。家庭日用品、家具、液晶テレビ、ロボットに至るまで、多くのヒット商品を生む。作品は、ニューヨーク近代美術館、パリ国立近代美術館、ミュンヘン近代美術館などに多くコレクションされている。近年は、大阪芸術大学にて教鞭をとるほか、中国でのRed Star Award 審査委員を務めるなど、教育活動にも力を入れている。長年にわたり、日本の伝統工芸、地場産業の活性化に関わる。近著に『地場産業+デザイン』がある。

ある値打ちのある家などを、行政が保存の手を差し伸べ、またそれらに共感する人は買い始めていました。

もともと伝統工芸品のほとんどは、暮らしの道具ですから、それらを使う住空間があつてこそそのものです。そして、その空間で人が交流するための大道具であり、小道具であつたのです。その空間がなくなってしまうから、伝統工芸品の行き場がなくなる。そのようにしてマーケットが縮小したまま時間が経過してしまいました。日本の伝統産業にとって一番の痛手でした。

伝統工芸が衰退したもう一つの理由は、日本人全体があまり忙しくて「ゆっくりと暮らすのはもう少し先にしよう」と、大切なハレの日の調度品を押し入れにしまいこんでしまったことです。

イタリアでは六〇年代後半から狭い家を広くする、つまり暮らしの舞台を作ることを始めたのです。それまで六〇〜八〇平米で四人くらい暮らしていたのを一二〇平米に住み替えていく、というのが一般的でした。その結果、クオリティの高い調度品やデザインが発達したのです。人々の暮らしの舞台が家庭になり、友人を招いたり、知人の家に呼ばれたり、という日常の暮らしがダイナミックに動き始めていたのです。そういつたことが、日本の手漉き和紙の照明器具TAKOが売れていった背景にもなつたのです。

日本も伝統的なものが 見直される時期に來た

イタリアの人たちが広い家の次に求めたのが、ふるさと志向でした。都心の住居以外に地方に別荘を持つということが始まっていました。由緒ある町並みを残すように行政が規制をかけたのです。そういう海や湖のそばに別荘を持つ、ということがブームになり始めていました。ポロニーヤもミラノもヴェネツィアも、五十年代の一時期、近代的な白い壁とガラスのアメリカ風のアパートを建て始めたのですが、古い家や街並みが壊れるということ、途中でストップさせました。そして、古い住宅をレスタウロ（修復）して昔の姿に戻して残すようにしました。それで、現在私たちが観光で訪ねるあの町並みが残されたの



フランスに移築された島根県の民家。茶会を準備中で、屋内には喜多さんの作品である組み立て式茶室「二畳結界」が設けられている

です。

日本は第二次世界大戦で八〇以上の街が爆撃され、消えていったなかで、京都、奈良、金沢は戦火から免れました。しかし、それらの町も戦後、相続税という名目や経済的な理由から、この半世紀で中心部は大きく消滅してしまいました。外国の都市関係の人や建築家たちは、なぜ壊したのか、と大きな問題として取り上げていました。古い町並みを守る法令が遅すぎた、ということもあって、歴史的に由緒ある建築物や古民家は消滅していったのです。

ヨーロッパでは、建物の外側は変えないけれども内部は快適に変えながら、町並みを残しています。それには、背景として、自分たちの民族や自然のアイデンティティを残そうという意識があります。戦火をくぐり抜けて、次の世代がさらに次の世代に存続させるということを、半世紀をかけて作り上げてきたものがヨーロッパの町には多く見られます。現在ではアジアの国々でも、歴史的なものへ注目が集まっています。

日本家屋の素晴らしさは自然とのバランスをとっていることにあります。飛騨に行けば軒先の長い家が多い。そして、雪国に行けば雪の重みに耐えるように太い柱にしてあるとか、屋根の角度が急であるとか、それぞ

れに工夫があります。最近ではエコが叫ばれています。昔の人は日常的にエコな暮らしをしていたのです。

世界一流の「極める文化」

去年、フランスのボルドーの近くにあるヴィトラ・デザインミュージアムの所有する敷地に日本の古民家が移築されました。島根県から三棟移築する予定で、最初の棟が完成したのです。このミュージアムの代表者が日本の民家のすぐれたところを気に入ったのです。日本はエコ文化が完成していますから、その象徴として民家にスポットを当てたのではないかと思っています。パリなどからもたくさん取材班がやってきました。紅白の幕を張り、茶会を催し、その古民家に人が暮らしていたときのハレの日を再現したのです。

明治維新の後、日本の産業経済は発展しました。そのベースには江戸の文化があったのではないかと考えます。江戸時代に培われた伝統産業がその後の近代産業に結びついたのだと思います。日本は江戸時代に鎖国をしましたが、それは一方では文化の醸造だったと私は思っています。そこで育まれた文化は世界でも一流となったのです。

伝統産業には日本独特の「極める」、つまり職人たちが極めていくという文化があります。次代の日本のものづくりの土台を支えるのはこの「極める」という心だと思っています。

古民家には、人々の生活の知恵が詰め込まれています。それらを簡単につぶしてはいけません。現在、世界的にエコが言われているなかで、日本の役割は大きいものがあります。古民家は私たち日本のためにだけあるのでは

なくて、世界のためにあるということに、私たち自身も自覚める必要があります。フィンランドやヴェネツィアも、イタリアのものであると同時に世界のもので。日本もそういう意識に変わらないと、アジアの国々においていかれます。

子どもたちに伝統的な暮らしの体験を

その場合、教育の問題の大きさがありません。特に都会の子どもたちは自然からほど遠いコンクリートの集合住宅に住んでいて、日本の伝統的な暮らしを体験しないまま大人になることが普通になってしまいました。

私は最近、兵庫県の丹波篠山に手ごろな民家を見つけたので、それを改修して伝統工芸品のギャラリーにしようと思っています。

また、丹波篠山の地元の人たちが「集落丸山」というNPO法人をつくって、古民家の保存に貢献しています。集落の民家三棟を改装して一棟貸しのホテルにしたり、フレンチレストランがやってきたり、周りの農村とのコラボレーションで食の開発をしたりしています。ゆくゆくは世界中からの観光客の誘致をしたいという夢を描いているのです。海外のメディアでも注目してくれるところが出てきて、春に取材にくることになっています。世界の人たちに日本の地方のよいところを見てほしいと思っています。

私たちが、自分たちのアイデンティティとプライドを取り戻して、何が本物で何がそうでないのか、何が良いもので何がそうでないかを判断する力を、体験を通してつけていくことが大事です。古民家の役割は、私たちや次の世代にとって大変重要なテーマです。